研究区分	教員特別研究推進　国際共同研究・国際交流の促進

研　究 テーマ	先住民研究の潮流と東南アジアにおける山地研究の理論的枠組みの構築				
研究組織	代　表　者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	米野　みちよ
	研究分担者	所属・職名	フィリピン大学バギオ校・准教授	氏名	Tala Aurora Ramos
		所属・職名	フィリピン大学バギオ校・准教授	氏名	Junley Lazaga
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	米野　みちよ

講演題目

先住民研究の潮流と東南アジアにおける山地研究の理論的枠組みの構築

研究の目的、成果及び今後の展望

研究の目的

フィリピンの先住民文化の研究において、東南アジアの山地民研究（特に近年のゾミア論をめぐる議論）、および、英語圏における先住民学の視点や方法論を批判的に俯瞰した上で、世界的な先住民研究の潮流との対話の可能性を探ることを目的とする。

成果

近年、北米やオセアニアを中心に、先住民学が盛んになっている。(e.g., Hokowhitu 2022, Robinson 2016, Moore et al. 2017) そしてその動きは、日本のアイヌ研究などにも影響を及ぼしている。一連の研究では、先住民の人権、土地所有の権利、環境保全などに、関心が置かれていて、政治化の傾向にある。一方で、東南アジアの先住民については、2000 年代以降大陸部の山地民研究についてのゾミア論の枠組みとそれへの批判的言論が活発になり、山地民（先住民）とマジョリティあるいは国家との関係性に主眼が置かれているが、いわゆる英語圏の先住民学の視座は、あまり取り入れられていない。フィリピンの先住民研究もいわゆる政治化の傾向をしめしている。しかし、NPO や国連などの国際機関が関わった調査などが多く、アカデミックな調査との線引きが難しい点に特徴がある。一方で、人類学的な手法を用いた従来的な先住民文化研究も盛んに行われている。しかし、東南アジア大陸部の山地民の研究との対話ほぼ皆無であることが惜しまれる。結果として、フィリピンの先住民研究は、いずれの潮流からも距離をおいており、孤立化の傾向が見られる。

今後の展望

今後は、より広範囲の文献調査を行い、メタ研究を行う。また、2025 年度の書籍の出版をみすえて、2024 年度は原稿の整理を行う。先住民研究における研究成果発表の方法については、当事者コミュニティに著作権を帰す方法で、研究成果を発表することを検討した。先住民研究の潮流に一石を投じる。

＊本課題は、本学とフィリピン大学システムとの協定締結の準備の一環でもある。これは本学の国際交流の拡大を図るものである。なお、予算の減額と航空運賃等の急激な高騰、フィリピンにおける急激なインフレ等により、研究の規模を縮小せざるを得なかった。2023－2025 年度は、フィリピン北部を中心に研究を行うこととして、Camposano 氏は本研究へは不参加となった。また先方フィリピン大学のコルディレラ研究所の所長交代に伴い、Tindaan 准教授に代わり、Ramos 教授が本研究に参加した。